教師力講座 13

短歌の鑑賞文を書こう

東京都港区立赤坂中学校教諭
甲斐利恵子（かいりえこ）

Q 先日、短歌の単元で鑑賞文を書くという学習をしました。

鑑賞文を書くためには短歌自体を理解していなくては書けないだろうと思い、一つ一つの短歌について解説を加え、まとめていきました。

解説が終わって「鑑賞文を書きましょう」と言うと、子どもたちは「えっ、まだやるの」とうんざりした様子。でき上がった鑑賞文も今ひとつで、解説がほとんど生かされておらず、がっかりしました。どうしたら意欲をもって取り組ませることができ、自分なりの鑑賞文が書けるようになるでしょうか。

A 「短歌を鑑賞する」ということ自体、子どもたちには少々難しく、骨が折れることかもしれませんね。それに加えて「鑑賞文を書く」ことも加わるのですから、子どもたちには相当きつかったのかもしれません。

「短歌の鑑賞文を書く」という学習活動には、

① 短歌を理解すること
② 短歌を鑑賞すること
③ 鑑賞したことを表現すること

の三つが重なっていることを教師が自覚しなければなりません。

どれも完璧にやろうとして、欲張りすぎた目標を立ててしまうと子どもたちには負担感が強くなり、やらされているという感じを抱いてしまうでしょう。

今回は、「鑑賞したことを表現する（書く）」ということに重きを置いた場合の授業例を紹介します。

「鑑賞文」って何？

「鑑賞文とは何ですか」と聞かれたら、私は「その作品の『よさ』を語ったもの」と答えています。

私たちは、書籍でも、映画でも、絵画でも、いいものに出会ったとき、それを誰かに伝えたくなるものです。そう考えると、鑑賞文は、まさにその「よさ」を実感できた人が、その魅力をわかりやすく伝える文章だということが理解できます。

しかし、「すばらしかった」「よかった」「感動した」という言葉だけでは、相手に自分が感じた「よさ」を伝えることはなかなかできないものです。

いい映画を見た後、どんなことを私たちは言っているでしょうか。

- 主人公がとにかくかっこいい。
- 相手役の○○もいい味を出している。
- ストーリー展開がすばらしい。どきどきはらはらの連続。
- 背景の美しさが何とも言えない。
- 光るせりふがいっぱいあるんだよね。
- 泣ける。
- 演技がうまい。
- 音楽が本当によかった。

このような発言から、映画のよさを語るには特有の観点があることがわかります。

【映画を語る観点】
- 主人公の人物設定
- 俳優の魅力
- ストーリー展開
- 背景となる風景
- せりふ
- 場面設定
- 演技力
- 音楽
- その他

このようなことから、それぞれのジャンル特有の「鑑賞の言葉（語彙）」を使って表現することによって「鑑賞文」はでき上がると考えました。

■学習の流れ

単元 「短歌の世界」鑑賞文を書く

第1・2時
- 一、現代短歌の基礎知識
  - ①聞き取りメモ・まとめ
  - ②友達のメモから学ぶ
- 二、暗唱合格シート
  - ▶教科書を読む
  - ▶暗唱タイム

第3・4時
- 三、短歌を読む
  - ①学習ノート作成（製本）
  - ②資料集を読む

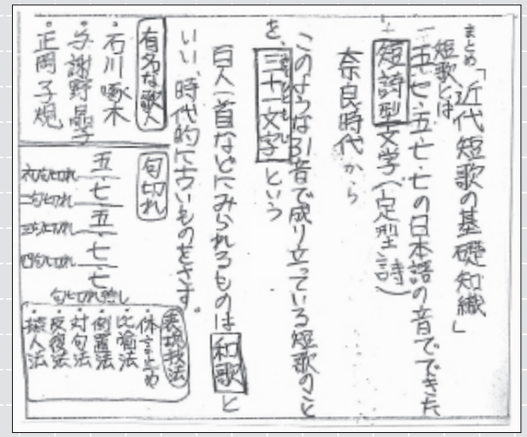
第5・6時
- 四、作品鑑賞会
  - ①話し合う作品を決める（第三希望まで）
  - ②グループ作り（三人〜四人）
  - ③作品鑑賞会
    - 【話し合いのテーマ】
    - ・どういう情景か
    - ・作者の心情は
    - ・作品のよさはどこか
- 五、鑑賞会のまとめ

第7時
- 六、鑑賞文を書く
  - ①下書き
  - ②清書（二百字）

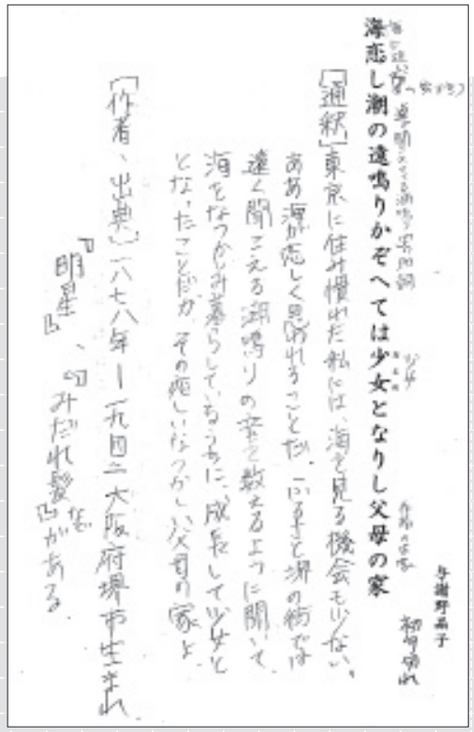
第8時
- 七、鑑賞文を読む
  - ①友達の鑑賞文を読む
  - ②まとめ（あとがき）・講評・学習のふりかえり

■目標

○短歌についての知識を獲得し、短歌を解釈するための情報を得て、まとめる。
○テーマに沿って深めるための話し合いをする。（意見を重ねていく力）
○鑑賞文を書く。



▲聞き取ったことをまとめたメモ



◀学習ノート

鑑賞文にたどり着く前に

鑑賞文の基本はその作品のよさを表現すること。短歌の鑑賞文を書くには、その短歌のよさに気づき、魅力を語ろうという気持ちにならなくてはなりません。解釈を聞き、理解できたからといって、その作品に魅力を感じるとは限らないところに難しさがあると思います。

解釈し、理解することによって作者の創作意図や感動を知ることができますが、作品の正確な読み取りにこだわりすぎると、鑑賞する立場の自由な発想も消してしまうことがあります。このバランスが本当に難しいですね。

とはいえ、やはり中学生の幼い感性や知識だけでは作品の世界に近づけないこともあります。

そこで、今回は、①**「聞き取りメモ」**で短歌の基礎知識を短時間でおさえ、②**「暗唱タイム」**をとることで短歌に親しみ、③**「作品の簡単な解説資料」**を用意し、それをもとに④**「学習ノート」**を作って作品をコンパクトに理解するという時間をとりました。

①聞き取りメモ

知識を伝えるときには、短時間でできる「マシンガントーク※」タイムを取っています。子どもたちは、現代短歌の基礎知識について聞き取り、すぐにそれをまとめていきます。十五分くらいかかりました。何人かの子どもたちがまとめたものを印刷して確認します。

②暗唱タイム

意味がはっきり分からなくても「読書百遍意自ずから通ず」です。暗唱しながら言葉の美しさや語感のようなものに気づき、短歌を鑑賞するときの観点にも近づいてほしいと考えました。

③作品の簡単な解説資料

教科書掲載の短歌をはじめ、いくつかの短歌について簡単でわかりやすい解説の資料を用意しました。今回は次の二冊を参考にして作成しました。

・『はじめてであう短歌の本』（あすなろ書房）

・『光村の国語のワーク』（光村教育図書）

④学習ノートの作成

解説資料を読みながら、子どもたちは「通釈」「句切れ」「表現技法」「作者」「その他」について書き込んでいきます。写すだけの単純な作業としました。

鑑賞文を書くための話し合い

短歌の解釈や理解は、今回、簡単な解説文を読むということだけに絞りました。時間的な負担をなくすことに加え、少ない情報だからこそ、自分なりのイメージを膨らませ、話し合えると考えたからです。同じ短歌を選んだ者どうしで話し合います。話し合う内容は次の三つです。

- どういう情景か
- 作者の心情は
- 作品のよさはどこか

友達が考えた情景に驚いたり、同じ心情を考えてうなずき合ったり、作品のよさの部分で盛り上がったり。友達と学ぶことは楽しくてためになるという実感をもったようでした。この話し合いは、ポイントが明確だったこともあり、いろいろな意見が出て、報告会も充実していました。

この話し合いの内容をもとに、鑑賞文を書く学習に入ります。

鑑賞文を書く

鑑賞文の条件として次のことを設定しました。

- 内容は話し合いを参考に、情景・心情・作品の魅力について書くこと。
- 二～三段落で書く。
- 最初の段落で作品の解釈（解説・説明）を書く。
- 後半、作品の魅力について書く。
- 常体で書く。
- 「思った」「すごい」を使わない。

条件を示した後、専門家が書いた鑑賞文として、『現代短歌の鑑賞事典』（馬場あき子監修／東京堂出版）の中からいくつか示し、書き方の手引きを示しました。

生徒の書いた鑑賞文は、まだまだのものが多いのですが、自分で選び、自分で書きたいと思って書いている様子がうかがえます。新しい試みでしたが手応えのある学習でした。

※「マシンガントーク」少し速いテンポで一方的に話すことをこう呼んでいます

▼生徒の書いた鑑賞文

「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたたかさ

俵　万智

この短歌は、日常的で身近な言葉でできている。作者自身の体験が素直に語られ、情景がくっきりとイメージできる作品である。

「寒いね」で始まり、「あたたかさ」で終わるところに、この作品のよさがある。反対の言葉によるギャップが生まれ、このギャップによって読む側は小さな幸せが大きな喜びとなることを実感できる。また、最後を体言止めにしたことによって、あたたかさに余韻が残るのもしみじみしてよい。